



アフガニスタン・カブール市

長い目より目先の生活 「援助最前線」は難問山積

世界銀行・シニアエコノミスト 石原陽一郎

WATCH FIRE

【開発途上国の明日】



ア フガニスタンは「テロとの闘いの最前線」であると同時に「開発援助の最前線」といえる。開発援助は長期的視点に立って行われるべきものだが、実際に貧困にあえぐ人たちにとっては、今日明日の生活をどうするかの方が重要である。

2001年のアメリカ軍の侵攻によりタリバン政権が崩壊した後、日本を含めた国際社会からの巨額の開発援助がアフガニスタンになされてきた。それにもかかわらず、現在でも国民の40%以上が貧困層にある。首都カブールも例外ではない。

深刻な住宅不足のため丘の斜面に違法に建てられた家々。無数のパラボラアンテナから「テレビの丘」と名付けられている。電気は時間帯によってははろうじて供給されているが、水道はなく丘の麓までロバを使つてくみに行かなくてはならない。

この景色を見る限り、この丘に数十年前には木々が生い茂っていたとはとても信じられない。氷点下30度に達するカブールの冬は厳しく、木々はすべて燃料として使うために切り倒されてしまった。貧困にあえぎ、今日・明日の生活すらままならない人たちに、環境問題など考える余裕はないのが現実である。

このような状況にあるアフガニスタンに対して、国際社会としてどのように開発援助を行っていくか課題は山積みである。(写真も筆者)